

豊かな健康：健体康心を求めて －統合知と七次産業－

(公財) 農業環境健康研究所副理事長・北里大学名誉教授 陽 捷行

われわれ人類の真の願いは、何時の時代にも何処でも誰もが「こころ豊かな健康」を維持し続けることにある。このことを否定する人は誰もいない。この世界に存在する科学や哲学や宗教は時空を越え、なべて「こころ豊かな健康」であるための真理を求め続けている。弾むような笑顔にみられる幼児の健康は、その子どもたちの体が健全な食物と良好な環境に依存していることに疑う余地はない。

では、現実の日々の生活のなかで健康とは何であろうか。世界保健機関（WHO）は「健康」を次のように定義している。「健康とは、完全に、身体、精神、および社会的によい（安寧な）状態であることを意味し、単に病気でないとか、虚弱でないということではない」。ここでの精神の訳は、英語のメンタル（mental：精神的、心的な、知的な）に相当する。

しかし、世界保健機関は1999年の総会で新たに「健康」の定義を以下のように提案し、その内容をほぼ十年にわたって議論した。それには新たに、スピリチュアル（spiritual：精神的な、霊的な、心の）と動的な（dynamic）という言葉が加わっている。すなわち、「健康とは、完全に、身体、精神、スピリチュアルおよび社会的によい（安寧な）動的な状態であることを意味し、単に病気でないとか、虚弱でないということではない」。この定義が決着するには、恐らくあらゆる分野の人びとによる長くて深い議論が必要であろう。スピリチュアルという語の内容は、数ある宗教の教えに深く関わっているからである。

20世紀とは一体どんな世紀であったのか。恐らく、科学技術の大発展とそれに付随した成長の魔力に取り憑かれた世紀といえるのではないか。ここでいう成長とは、あらゆる意味での物的な拡大を意味する。このような成長を支える科学技術は、わずか百年前にはじまり、その後肥大・拡大し巨大な潮流となり20世紀後半と21世紀前半を駆け抜けた。この潮流の中で、われわれはものを豊かに造り、そ

の便利さを享受するとともに、この技術を活用し宗教や政治や主義からむ多くの戦争を行ってきた。科学技術こそが経済成長や豊潤な生活に不可欠だという考え方が、今なお世界を驚づかみにしている。

これらは「技術知」がなす業である。それが文明の発達を促した。「技術知」は目的と手段を定め、たうで地球の資源を活用し、平面的な方向に新しい技術を開発していく。「技術知」に対して、人類が長い時間を通して生活の場から観察し、獲得してきた智慧がある。「生態知」または「経験知」とも呼べる。「生態知」は「技術知」を生活の場から深く掘り下げるため、思考や研究が垂直方向に高揚・深化し、文化の進展をもたらした。

20世紀に得られた「技術知」は、温暖化やオゾン層などに代表される地球環境問題を起こした。しかるに、文明を発展させ環境を守るために「技術知」は不要か。そうではない。「技術知」も「生態知」も人間の叡智が生み出した貴重な財産である。今、われわれが必要としているのは、これらを融合する「統合知」ともいえる知を創出することである。このことは、いま農水省の六次産業（生産・加工・流通・販売）構想や医福食農連携事業、北里大学や当研究所で行われている農医連携構想に現れている。

今後、農医連携や医福食農連携をさらに深化させるためには、冒頭に述べたスピリチュアルの概念・健康・癒し・環境保全・生きがいづくり・教育・景観などが、これらの連携構想に加算されなければならない。農は六次産業を越えた七次産業に発展しなければならない。いや、農は本来そのような役割を担っていたのである。われわれはその役割を置き忘れてきたに過ぎない。

